



TITLE:

新譯日本地學論[文]集(一七): ライン 中山[道]誌(三)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

新譯日本地學論[文]集(一七): ライン 中山[道]誌(三). 地球 1931, 16(4): 279-292

ISSUE DATE:

1931-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183959>

RIGHT:

離性に就いて考察を試みたが、研究は未熟であり、結論を得るまでに至らなかつた。引き続き多くのフィールドをとり、種々の要項に就いて研

究を続ける積りである。終りに當研究に御助言を賜つた諸先生に厚く感謝申し上げます。

(昭和六年六月下旬)

## 新譯 日本地學論文集 (二七)

### ライン——中山道誌 (三)

#### 一、京都から美濃境まで(續き)

瀬田から宇治川に沿うて伏見に到る路があるが中山道は約一里以上距つた草津の方に向ふ、草津で東海道は東に曲がる。ケンプエルは夙にこゝに特に美しくて杖に作る爲めに採收される竹の根に就いて述べてゐる。「そこには苦い散薬が調製される」註 和中散のことであるといふ彼の他の記事で一八七五年夏のことを思ひ出す、その時私はケルン生れの益友博士ケーニヒス (Koening's) 君と一緒に名古屋から京都への路で草津を通過した。

詳しく云ふと草津に着く前、まだ東海道上で予等は一軒の宿屋に立寄つた、此の家の對ひに甚だ古い大きな藥屋がある。二階家の下の店に強く刻つた縁のある二つの古い額が懸つてゐた其の一つには主人の名が大きな藍色の支那字で書いてあり、他の額にはもつと大きな金字で教丸とある。此の有名な橙色の丸薬は見本として大な盆の上に置かれてあつた。予は其の二十粒を五厘(四ペニツヒ)で買つた、この薬は又高貴な起源を有する外に我々の薬と比べて甚だ廉價であるといふ大きな優越なる點を有する。予

の聞く所に據るとこれは腹痛と毒消しとに効く——猶ほ艾を手に入れた。讀者、日本にゐた多くの人ですから、此の言葉の意味に就いて尋ねるであらう。或る西班牙語の辭書にはかう書いてある。

『艾は苦艾の莖と葉から作つた白灰色の綿毛である、艾は支那人及び日本人が病のある四肢の上で外皮を焼く爲めに用ひる』この説明が全然正しくはないと云ふ事は、日本で人力車に乗つた際、車夫の裸の背を凝視した者には克く承認されることである。この人達の腕、肩、背及び臀を往々飾つてゐる馬克銀貨の半分から全體又はそれ以上の大さの瘰癧は病に罹つた處に燒き付けられたのではないが、我が獨逸で古く刺路で病氣の豫防を仕ようとした如く今では主に豫防を期待して發泡膏を用ふる様な場合に點灸するのである。——獨り苦艾からのみでなく艾屬(*Artemisia*)の他の種からも其の花の部分で艾が調製される。(艾を作るアルテミシアの一種、殊にイブキヨモギ(*A. vulgaris* L.)は特に伊

吹山に多産して名高い)。灸點するには僅か許の艾を伴の處へおいて微かに燃える線香(*incense-jum religiosum*)の皮から作る)の赤くなつた炭で點火する。

此の藥屋の二階には讀方を教へてゐる學校があつた。一人の兒童が二三の言葉又は短文を話して、寧ろ歌つて見せると他の小さな群れが其を合唱して繰返した。子供達が綴られた言葉に馴れる爲めに之が續行された。先生は肩と肩とが衝きあふ部屋でさうする中で多くの子供の爲めに忙殺されてゐる様であつた。予等の行つたことが幼なき者の仕事を少し掻き亂した、其のうち多くの多くが開いてゐた戸窓の處へ急いで、前讀みをする小さな代理教師でさへ兩人の異人サンを看る爲めに二三度現れた。

草津から一里半中山道の平坦な道程を行くと立派な寺のある守山驛に達する。こゝから東方には此の全地方で一番高い唯一の圓錐形をした山で、曩に述べた三上山が見える。草津から美濃境までの路は多くの小流の乾いた河床を越す

流れのあるのは雨の降る時許りである。予等の達した第一のかゝる川は兩側の稻田よりも數米高い。クニツピングが、之を此の國の二三の他の河床にも認め得る様に、兩側の堤を續ぎ續ぎに高くする必要がある程著しく砂が沈積する結果だと解釋したのは正しい。

守山と愛知川驛との間で中山道は砂及び珪質岩礫から成る多くの著しくない高みを越える。その兩側には百米乃至四百米の高處がある。かなりの高い處と多くの不毛の場所とが南方と南方とに見える。尾張境の南部美濃に於ける山と丘との景觀も同じ性質を表してゐるから、其の詳しい事は次の旅程の内に續いて述べ様と思ふ。

愛知川に到達する前に此の砂質丘陵の最後のものを越える際、左手に當り湖水の南東に向つた一つの灣の前に湖中の最大島である沖ノ島が見える。此の島は西側又は湖水から見る方がよく形を示すが其の高さは地圖に表されてゐる様に著しくは見えない。次に山背に美しく位置

してゐる村と灰黒色の岩石の間にある快い綠藪とを眺める。之に反し北東に隣接する地方は樹木がなくて不毛である様である。

愛知川は中山道側の湖水への最も著しい注入川であるが當時には其の幅百米の河床の半分も水を以て滿されてゐない。この川は無論其の右岸にある同名の集落と共に單調な平野の内にある、この平野を過ぎ行くと高宮驛に達する。湖水は西方の見えない所にある。周圍の田畑はよく耕され、米及び普通の穀物の外、棉、麻が植ゑられ、猶多くの丘陵がかつた地には茶が栽ゑられてゐる。一部には又果樹を見る。街道の此の部分の主驛を高宮と呼び、精巧な木綿織の產地として知られてゐる。

今や道は近江、美濃の間の國境山地を越えゆくのである、先づ琵琶湖を再び眺められる低い山脊を越えて鳥居本驛に下り、次いで摺針峠を越えて番場の方へゆく。此の峠の上にあつて其の絶美の眺望で名高い茶店は海拔一七五米即ち

湖水面の殆んど二倍の高さにある。こゝで我等は湖水に別れを告げるのである。此處からは琵琶湖を一番幅廣く見渡すので、湖の西方には比良、比叡山、男山註 前に注意した様に男山は誤で寧ろ醍醐山とすべきであるのある全く森林で蔽れた山脈、北方には同様に森のある竹生島、北東岸の多くの村々並にずつと返つて近江美濃境の高い山地を望見し得る。然し近い處では略南西に當つて湖岸に近く立派にして歴史上顯著な彦根の町が二萬乃至二萬五千の人口を以て横はつてゐる。其の白い城は琵琶湖のまはりの多くの見晴しで目に入る。こゝに近江の最も著しい大名で譜代の出頭である井伊が住んでゐた、譜代といふのは最初の徳川將軍に仕へて其の後關ヶ原の戦で家康公を援けて勝利を得しめて確然たる國家の權力を獲得させた人々である、家康はヘスチングス戦役の後ノルマンの騎士征服者ウィルヘルムのした様に彼等を大小名に封じた。

將軍が未成年である期間、彦根の大名は攝政

の高職についてゐた。井伊掃部頭は井伊家の最後の人で、もはや國內が騒然としてゐた時にかゝる者として江戸で役目を演じた。一八五九年に彼は暗殺された程惡まれ者になつた。

琵琶湖東側の最も多くの所では養蠶と絹織物とが重要な生業であるが茶の栽培は僅に地歩を占めてゐるに過ぎぬ。

中山道は番場から近江の湖水を離れて曲がり東方に向つて美しき景觀の處を過ぎ、醒井、柏原かしはらに向つて著しからざる高處を越えてゆく。此の全路程の上で立派な山々が近く遠く道の兩側に顯はれる。其の最も立派で最も有名なのは伊吹山である。多くの歐人が此の「一つの截頭された圓錐形の砂糖の塊」と云はれた嚴めしい山を、比叡山から、大津から、他の諸點から、湖水の北東の背景を成して堂々そゝり立つのを見たが誰れもまだ登らなかつた、併しこの山は特に自然研究家に對しては勞苦に價する一つの目的物である。予は一八七四年の春、國內に於ける

最初の大旅行の準備に際して、予の畏敬する古き友人にしてシーボルトの有名な弟子である伊藤圭介に尾張及び美濃に於て最も探究する値ある箇處に就いて尋ねた。彼は云つた『植物學家に對しては予は第一に伊吹山を擧げる』と、それで予は此の山を豫定に入れた。雨が降つて實行を挫折せしめた。予は絹工業を見る爲めに京都から琵琶湖北東岸の長濱に行つたが、こゝから七月後半に豪雨の中を伊吹山の北西麓註 西麓の異人さんは一日中、より好い天氣を無駄に待つた、其の後登山することが出来ずに藤川を経て中山道上の關ヶ原へ向はなければならなかつた。宿屋の主人の話す所に依ると、この山には百三十種の藥品を産する。其の二つを彼は所藏してゐて見せて呉れた、それは鍾乳石と珪灰石の一塊とであつた。予の特に興味を覺えたのは陸産貝を獲たことで、暖かい雨が到處に貝をちびき出してゐた。ヤマキサゴ類の中には長さ一

の説 春照村の方へ旅した、春照で獨逸國から

の異人さんは一日中、より好い天氣を無駄に待つた、其の後登山することが出来ずに藤川を経て中山道上の關ヶ原へ向はなければならなかつた。宿屋の主人の話す所に依ると、この山には百三十種の藥品を産する。其の二つを彼は所藏してゐて見せて呉れた、それは鍾乳石と珪灰石の一塊とであつた。予の特に興味を覺えたのは陸産貝を獲たことで、暖かい雨が到處に貝をちびき出してゐた。ヤマキサゴ類の中には長さ一

耗の纖毛を有するオホケマイマイ (*Helix nakensu*) が特に多かつた、猶一つのヤマキサゴと多數のキセルガヒの美しい種を採集した、併し前年四國に多産するのを見且つ當時はまだあまり廣くは知られてゐなかつた巨大なオホギセル (*Clausilia Yokohamaensis*) を採したが無駄であつた。

翌年、京都に於ける予の従者が數日暇があり且つ充分に訓練された時に、予は彼を伊吹山の頂上に遣つてそこに産する植物を採集させた。之は勿論山岳植物に親しむには特に役立つ材料ではなかつたが、此の山には其の高さも略々同じ箱根山の最高點と同じ植物が生育してゐるといふ確信にこの採集物によつて達した。其の最も著しき品質はキクザキイチリンサウ (*Arenone altaica*, Fisch.) ナガバメギ (*Berberis chinensis* Desf.) シメンサウ (*Primula japonica*, A. Gray) 其の他、之等は從來南日本で未だ認められなかつたものである。

夙に日本武尊は伊吹山と其の山神とを知つて居られた。この山はいつも鬼の住家として認められた。伊吹山と其の近隣は古い不安な時代には屢大膽不敵で恐ろしい盜賊共に役に立つ隠家を多分供した。此の隠家から出て彼等は容易に街道上の旅人又は京都の住人にすら掠奪を恣にすることが出来た。尙ほ、春照の宿屋にあつた鍾乳石の一片から見ても、又我等が次の日中山道に出る道で渡つた伊吹山から發源して近江の湖水に急ぎ流れる川の礫となつた多くの石灰岩から見ても明かな様に、小な洞窟が山中にあることは眞實である。

北方に註 西方なり當り、伊吹山から一の谷窪地で隔てられて、越前の國境山地と連接する支脈としてより低い七尾山がある。

伊吹山麓から中山道に至る最も近い道は美しい丘陵地を横ぎつて關ヶ原の方へ行くが、他のものと良い道は一列の村々を過ぎて大きな柏原驛(大なる葉の柏(*Ruercus dentata* Thbg.)といふ

ラハ耕作されぬ草地とから名づけたもの)の方へ附いてゐる、この美しい大きな本陣(身分高き旅行者の投宿する宿屋)に外國人は關ヶ原に於てよりもより良く泊まれる。猶ほこゝで殊に近隣の高みへ登るならば其の地方と美しく森で蔽はれた山々を良く展望することが出来る、山のうちでは殊に南方にある穹窿狀の靈仙が目に入る、この山は既に旅行者が愛知川の手前で美濃との國境山地の自餘の峰巒と共に認めたものである。

## 二、美濃を横ぎつて

中山道はこゝ美濃では木曾川の流域の中に止まつてゐて、西の國境山地から豊饒にして、水に富んだ美濃、尾張平野を横ぎつて行き、尋いで新しい丘陵地を過ぎて美しいが高低參差たる信濃國に登つて行く。近江から美濃への國境越えは柏原から一里の今須の近くに在る。

中山道は波狀の丘陵地を越えて之に接した平野に下りてゆき、今須から一里にして歴史上重

要な關ヶ原驛に達する。一六〇〇年の十月こゝで日本歴史上最も血腥い且つ結果が最も重大であつた戦が開かれた。徳川家康は此の戦に於て敵の合同軍に勝ち、順々に屈服させた。然し關ヶ原戦役の結果は主として次の如きものであつた。

一、徳川將軍家の翹建、之が爲めに帝國々運に關する權勢の影をのみ残し、之を三百年以上を通じて江戸から制限されずに支配した。

二、數百年に亘つて荒らした内亂後、同様に永い間の平和時代が始まつたこと。

三、封建制度の完成、この制度は既に源賴朝が第十二世紀末の頃基を置いたもので今や最高の特色を有する形式に達した。

四、基督教の根絶、基督教は葡萄牙の宣教師によつて武装なく、法律の保護なき人民に對し救世の福音として第十六世紀の中葉以來辛苦して宣教され、やがて深く根附いたものであつた

五、鎖國竝に外國との通交を長崎で、和蘭人

及び支那人に限りたること、この兩國人は之に際して決して名譽あり又羨むべき役割を演じなかつた。

尾張から出た老獪にして野心を藏した農夫の若者であつた秀吉は異常な軍事的及び統治的天資によつて最高の勢位に跳上り、日本の無政府状態を終らしめ、加之彼の連勝の將士を朝鮮及び支那を征服する爲めに送出した。それにも拘らず彼は一五九八年に死するに當つて決して確かとは云へぬ後繼者たる六歳の子秀頼を遺した。彼が關東八州の統治を任かし、江戸を居城とした家康は、日本歴史が指示する最も秀でたる人格を有し、其の權勢を未丁年の小兒と其の顧問達に屈從せしめることを欲せず、寧ろ最高權力を得んと務めた。秀頼と太閤様が彼に附けた五人の太守とを中にして秀吉の凡ての臣下竝に國內の凡ての他の諸侯、殊に基督教徒も亦集つた、太守達の中では石田三成が運轉する車輪となつた、又臣下達は秀吉の死ぬ以前に彼に向



ひ繰返して忠誠を誓つたものであり、諸侯中で長州の毛利、薩摩の島津の兩大家の如きは徳川家の昇る權力を其の範圍に止めんとする主動者であつた。數に於て遙かに勝つた大勢と多くの練達せる將師―其の中には殊に、朝鮮の勝將であり、基督者であり、ジェスイット教徒としてドン・オースチンの名を持つた小西がゐた―が加擔した、然し指導竝に目的に關した統一を缺いた。集合場は大阪であつた。同盟軍はこゝから伏見を経て中山道へ、中山道に沿うて美濃の大垣まで前進し、こゝに堅き陣地を取つた。其の間に隣接せる尾張に於ける家康の興黨は其の勢五萬集まつた。同數の軍兵を徳川方は江戸で集合した。其の半を率ゐて家康は東海道に沿うて進み、尾張で彼の忠誠な軍勢と合した、他の二萬五千の勢は子息秀忠之を率ゐて中山道に沿うて進むことになつた。美濃の首市岐阜の占領を以て家康は彼の作戰を開始した。此に對して敵軍は大垣を捨て關ヶ原へ退き、こゝで十三萬

の軍勢は中山道に面して、三里距つた伊吹山の支脈を掩護物として戰列を敷いた、此の間に家康は七萬五千の勢を以て之を追うた。熱した戦が永い間勝敗を決せず續いたが、指揮の統一敏活なこと及び慎重なことが遂に徳川勢に勝利を得させた。彼の子息は來着することが遅かつたがたゞ京都及び大阪の方へ敵を追撃するに參加し得たのみであつた。石田、小西、大谷の如き最も秀れた基督者將軍は日本人の説によると京都で不名譽に殺された、其の際彼等は自盡するのを拒絶し、さて敵によつて公然死刑に處せられた、大多數の他の者に對しては家康は寛大にして穩便な意志を示した。

關ヶ原から五分許り道を行くと中山道から左に分れて合川峠あがたの麓にある古い土塚の方へ松並木路が走つてゐる。塚の上の鋪石と苔に被はれた圍ひとが戦争の間、家康がそこから命令を出した箇所を示してゐる。然し村から京都側の方には記念碑を載せた他の土の岡があつて、こゝ

に首塚があることを記念してゐる。此の場所は戦神八幡を祀つた社に遠くない。惨死した敵の首を埋葬したかゝる岡は周囲の到處になほ多くある、何故と云ふと、逃走中に非命に斃れたなほ遙に多數のものを除いても、既述の戦争で敗軍側の數一萬人は其の生命を失つた筈であるからである。

關ヶ原の次は一里半先の垂井驛でこゝには金山彦大神を祀つた有名な神社がある。この村を出はづれると中山道から右に良い路が分岐し南東方で既に擧げた城下町で、大名戸田采女正(十萬石)のもと<sup>あ</sup>の居所であつた大垣を過ぎ、尾張の大首市名古屋へ、從て東海道に導く。垂井はもはや甚だ沃饒な美濃平野中にあるが、中山道の左手には猶ほ森に被はれた高處が一里三分ノ一先の赤坂驛まで連なつてゐる。これは北方に見えてゐて山地の長い列の中に一支を成す梅山<sup>註</sup>池山の支脈である、かの山地は美濃の北西及び北方を限るもので、其の最も外方の突出部

は赤坂の北方中山道から纔に十二町距れる丘陵金生山で、こゝはこゝで採石される美しい大理石がある爲め特に興味を要求する。

大理石は黒、褐赤、灰、時に白い縞狀か又は全然白色の石灰岩であつて、拳大又はより大なる球、卵、蓋のある杯及び瓶形の小壺、小箱、硯其の他の種々の小な物が澤山に之で作られ通行者に賣出されてゐる。(こゝで同様に買ふことの出来る美しい肉紅玉髓の球は北陸道殊に加賀から産出する)石には立派な光澤を附ける、我々には其の中に著しい化石即ち海百合の莖と紡錘蟲とを含むので一層の興味がある。殊に灰色の種類は紡錘蟲で滿されて居る。磨いた表面には暗色の地が到處紡錘蟲の灰白色で小舟形、橢圓形、圓形を成す縦斷、横斷を以て密に鑲められてゐるのが見え、鋭い眼ならば肉眼で既に其の房壁によつて惹起された對稱的小房構造を認め得る。この紡錘蟲は誰も知つてゐる通り有孔蟲に屬し、ロシア及び北アメリカに於ける

如く石炭系を指示するものとして差支えない。

（この記事を日本に住んでゐる外國の地質學家の一二の人も見るといふことを期待して予の附加へたいのは、同じ地層が予によつて京都及び山城平野の北方の鞍馬山の森林中でも發見されたことである。鞍馬の小村は京都の北三里、森で被はれた山の間にある、この山で山城平野は終つてゐる。鞍馬山は北方の高まりにある毘沙門様即ち力技と劍術の神の堂竝に英雄源義經で有名である、義經は弱冠の時こゝに住ひ、淋しい夜毎の徘徊中天狗様にあひ、劍術を教はつた。今でも堂内にある義經の劍並に高い方へ行つて背競石せくらいしの峠に近い森の中で垣を繞らした一本の古い杉を見せて呉れる、此の杉は胸の高さの所で周六米一五あつて、この處で初めて妖怪に遭つたのだと説明して呉れる。常緑の櫟、山茶花、高いヒメシヤクナゲの藪、樅の生えた淡い森の中の到處に灰色石灰岩の大塊が横はつてゐ、それには海百合の基が一部凸出してゐる。

こゝに出てゐるものが北方の山地と琵琶湖の東方を通つて赤坂のものと聯絡してゐることは眞實の様である。

赤坂を出發した後は全く低原になるが、實際は左手に山地が遠く退いてゐて、更地山さらぢさん 石山いしさん及び文珠山は北方に見える美濃越前の國境山地の最外の前衛として認むべきものである。木曾川の多くの水に富んだ支流は此の山地に發源し、街道上では橋及び船で此等を越える。諸川は高い堤で隈どられて、周圍に擴がてゐる田畑と多數の村とを洪水に對して護つてゐる。この良く耕作された地方を眺め渡すことは農業に對して理解を有する者に取つては各季節とも愉快で教へに富んでゐる。若し春季來訪するならば深い畝の間に列をなして栽えられた油菜、大麥小麥及び他の雜草のない豐作物の様な冬作物を見る事が出来る、然るに盛夏に於ては今や沼地に變へられた地面を蔽うてゐる若い稻の美しい緑に目を喜ばせる。然し秋に於ては其の重い

黄金色の穂を見渡す、穂の一つ一つは夏の熱と仕事との成果である。(心學道話卷ノ二、二枚目に云ふ『民草の夏のかせぎのほどほどの穂にあらはれてみのる秋の田』と)。美濃産の米は全國中最も良いものとされてゐる。それで徳川將軍はこの最も優れた食料品に關した自身の必要品をこゝから取寄せた。

赤坂の次の驛は美江寺、河渡及び加納である。美江寺で木曾川の最初の主要支流を越え、加納で第二のものを越す。前者を呂久川と呼び、後者を郡上川、ずつと下流では加納川とも云ふ。其の間で街道はなほ細い犀川と長良川とを越えてゆく。美濃國の凡ての此等の諸川、特に初めに舉げた二つの川に於て、時に教へ込まれた鶺鴒で漁獵を行ふのを見ることが出来る。鶺鴒は之に向つて支那に於てよりも遙かに僅かに使用される。是れ明かに甚だ綺麗好きな日本人が汚くて臭い鳥と親しくなることが出来ないのは當然であるのに依る。

小舟で越す長良川(河渡川)の彼方側では養蠶が普通の農作と共に重要な生業として營まれ、それから先きの街道の大部分でもさうであるのに、東海道上でも養蠶が殆んど見られぬ位である。―若し、冬の作物が收穫され、米、棉及び他の夏の作物が列を成して植え替えられ、野良仕事が稍々閑散になつた後の盛夏に我等が鏡島村クモミ村等註 所在未詳或は藏前(クラノマヘ)かを通つてこゝに来るならば到處に小さな絹紡績工場と紡績機が操業してゐるのを見る。日本の此の部分の人民は勤勉で無邪氣で親切な本質を有することが著しく、人々の生業に對し密接に興味を持つた外國人は到處で歡迎される。殊に昔の城下町加納の機業には興味がある、これこゝでは主に有名な紋縮緬が織られ、其の際山蠶の光つた絹も一部利用されるからである。

加納は永井侯(三萬二千石)に屬したが其の小さな城は殆んど其の跡を残してゐない。一八六八年及び一八六九年の王政復古は國內の他の百

箇所の様にこゝで角を矯めて牛を殺し、美術及び古物愛好者が興味を以て看るであらう多くの物を破壊した。

加納の北方一里に美濃國の首市で飛驒をも含む岐阜縣の首市岐阜がある。其の人口一萬で、加納から街道が附いてゐる名古屋を距ること九里にある。

附載した地圖には岐阜は示されてゐないが、其の北側にあつて、急に聳え、森で被はれた金華山は示されてゐる。金華山の峰の上に織田信長は城を築かした、又二つの低くて同様に叢林で蔽はれた丘陵即ち稻葉山と相場山とが中山道の方へ對して金華山から前へ出てゐる。此等の高處の頂から晴天に際しては東海道に於ける城の町名古屋及び桑名を望見することが出来る相場山の名は、昔岐阜の商人が一種の光による電信所を設立し、旗を以て名古屋及び桑名の取引先に米價を報らせたことから附けられたのである。

名古屋から加納を経て岐阜に到る街道は北方に郡上川の谷を通つて續いてゐ、左には有名な紙の産地の牧谷を出し、八幡へ通じてゐる。八幡は大名青山(四萬八千石)のもとの居所で、森に被はれた山即ち眞の青山の上に高く城を起した、丁度それは我が獨逸で中世紀に野武士がしたのと同じであつた。絹に富んだ八幡から道は進んで油坂峠を越えて越前へ通じ日本海に達する。

加納から四里半ゆくと鶺鴒沼である。中山道は小さな境川を越えてゆき、新加納で豊穰な平地を去り、砂質の原を過ぎ薄い松林を通つて漸次美濃東部の丘陵地に登つて行く。鶺鴒沼に到る一時間前に、右手に木曾川を隔て、其故もはや尾張國にある犬山の圓錐山を見る、其の麓には同名の町があり山には大名茂瀨の城がある。鶺鴒沼の後になると道は急に約六十米上つて鶺鴒峠に達する。こゝで大津からこゝに到るまで忠實にも道を示して呉れた感謝の情に堪へぬ伊吹山が

最終の別れの會釋を目くばせする。一つの養魚池を右手にして、其の側を通ると道は急に峽谷の如き谷を通じて再び泡立つて怒號する木曾川の岸に導く、我等は木曾川の右側を太田驛に到るまで沿うてゆく。此の路程は全街道中路の最も悪い處である。

太田の北方二三里に刃物打の兼元と兼光とを以て昔から有名な關がある。太田を過ぎて木曾川を渡船すると今渡に達する。川はこゝで幅五十米ある、上流へ半時間の路程の處で飛驒川が合流する爲めに水量を増してゐるのである。中山道は今渡で、この先き之を見捨てない木曾川の左側に移つてから、伏見、御嵩、細久手、大湫大井、中津川、落合、馬籠の各驛を過ぎて高さ七九七米の神坂峠註 馬籠峠のことでは實は神坂は馬籠峠ではないへ通じてゐる。この峠は美濃と信濃の間の古い政治上の境ではなくとも自然の境である。國境は落合と馬籠との間で既に二時間も早く越えて了ふ。木曾川は此の九十哩長い一般に西から東に向つた

地域の内では左手のかなり離れた處にいつも在る、それが爲めに稀に其の河床を望見するのみである。こゝは波狀で、山脊の平な丘陵地で、今渡と大井との間で漸次に高まつて琵琶峠註 原文には Hiharu Ridge とある。と五四三米に、直に來る大湫

驛の近くで五四一米に達し、尋いで大井に向つて、木曾川の左岸の支流である阿木川の河床で二九〇米に下り、再び緩かに美濃の境に高まつてゆき荒町で五四〇米、馬籠で六一一米に達する。此の地方の單調にして荒寥たる性質がたゞ稀に豊穰な谷盆地で中斷されるのは嬉しいことである。

伊勢、尾張、三河及び遠江の東海道の諸國の境並に他方では近江美濃の境に擴がる丘陵地の景觀に共通の特徴が現はれて居る。高さ百米乃至五百米の山脊の平な高地は全然荒寥として不生産的であつて、多くの不毛の墟埠で色のついた箇所を現はしてゐるか又は砂及び珪質岩礫で被はれてゐる。こゝでは美しい森が何處にもなく、

一度でさへ小範圍の緑の衣を認めることが出来ない。杜松、シホデ、蕨などの低い散在した藪並にこゝかしこの無恰好な松を有つた疎らな木立が充分に土地の不生産であることを示してゐる。多くの箇所殊に細久手驛の方なる月吉には第三紀の植物化石と海棲貝類が出、他の箇所には淡黒色で風化の著しく進んだ花崗岩の大塊が露はれてゐる。殊に花崗岩の種類には文象花崗岩と名くべきものがある。美濃尾張の境の勝山（からやま）註文には Kachigawa に於ての如く我等は繰返して古期の無化石粘板岩に出會ふ。此の地方に於ける豊富な粘土層並に美濃、尾張、三河三國の境界に於ける文象花崗岩の風化した長石は廣く行はれる製陶業の基となつてゐる、製陶業は美濃の南東部と之に接する尾張に於て多數の村々に互つて行はれ、數千人が之に従事してゐる。中山道に到ると製陶業は唯大井、中津川驛間の茄子川（なつびが）に一箇所あるのみで、こゝでは普通の陶器と粘土製の容器を作つてゐる。

中津川は柳川の左岸に當つて小さな豊穰な平地の中にある。人若し南方又は北方から來て之を境する高みの一つへ登り、尋いで街道を下つてゆくとすると、此の平地と中山道上に永く續いた親しげな小町との眺めは驚くべきもので且つ目を覺さすものである。この美しいオアシスには農作と共に養蠶も孜孜として營まれる。

『落合で風景が變る、落合の上手で殆んど垂直な高い壁を有つた狭い谷から滾出る釜澤川の對岸に、此處彼處にある峻しい斜面が、木曾川上流の永く憧れた山地に直に達せられることを豫期させる。人は上述の荒れ川を渡り馬籠まで延びてゐる谷の南側を登つてゆく。荒町の手前で、孤立した茶店の處にある境界杭が美濃と信濃の境を示してゐる、何故に境界標がこゝにあつて神坂峠に立つてゐないのかは珍らしいことで歴史上の理由によつてのみ之を能く説明し得る』

（クニツピング）（未完）